



論文 『待つ』と『ゴドーを待ちながら』の接点 : 文学作品における人間性

著者	エルデミール アリ・ヴォルカン
雑誌名	国際日本研究
巻	9
ページ	107-114
発行年	2017-02
その他のタイトル	Articles The Contact Between Matsu and Waiting for Godot : Human Nature in Literary Works
URL	http://doi.org/10.15068/00146781

研究ノート

『待つ』と『ゴドーを待ちながら』の接点 —文学作品における人間性—

The Contact Between *Matsu* and *Waiting for Godot*:
Human Nature in Literary Works

エルデミール・アリ・ヴォルカン (Ali Volkan ERDEMİR)
エルジェス大学文学部日本語日本文学科 准教授

本稿は、太宰治作『待つ』とサムエル・ベケット作『ゴドーを待ちながら』を比較対照する試みである。『待つ』も『ゴドーを待ちながら』もこれまで研究対象として度々取り上げられており、誰を待つのか、何を待つのかに関する議論も出尽くした感があり、現在そこに新たな考察を加えることは無理に等しい。そこで、両作品を比較対照することにより、文学作品の重要性および社会的相違を持つ国民性を超えた一般庶民の人間性について考察することを目指す。

This paper deals with *Matsu* by Dazai Osamu and *Waiting for Godot* by Samuel Beckett. Both of them have been subject to various studies until today, therefore it is almost impossible to produce a new idea on whom or what is being waited. What is focused on in this study is the importance of literary works and how they contain humanism that go beyond nationalism.

キーワード：待つ ゴドー 戦争 文学 人間性
Keywords: Waiting, Godot, War, Literature, Humanity

はじめに

歴史を振り返ってみると、人間は火の利用方法を発見し、車輪を発明したように何万年も前から文明を発達させている。しかし、その火でその車輪を焼き捨てるのもまた人間である。つまり、単純に、良い人間もいるのに対して悪い人間もいるということだ。人間の為になにかを作る者がいるのに、逆に、それを破壊する者もいる。その行為をうまく、分かりやすく伝えるのも、文学作品の役割の一つだと考えられ、文学作品に見られる人間性は国を問わず顕在化している。人間はその作品から、他の人間の感情に触れるチャンスを与えられる。

文学作品はある意味コレクティブ・メモリーであり、そこに歴史的な出来事、社会的な事柄、個人の考え方などが保存されている。ある歴史的な出来事は数年経つと、歴史の文献に残るだけで、忘れられる場合が多い。しかし、文学作品の中でそれが述べられたら、過去のことを思い出し、また、それを想像して、現在から遡って当時の社会や個人のことを理解することができる。したがって、今ここで起こっていることを理解するためのよい参考となる。読者はその作品から学び、主人公に基づいて自分をもっと理解し、出来事に注目して、今、ここで起こっていることに対する行動の選択を行う。このような文学作品の役割として、『待つ』と『ゴドーを待ちながら』は良い例である。

1. 比較対照の可能性

短編小説である『待つ』は日本人作家太宰治によって書かれた。『ゴドーを待ちながら』はアイルランド人作家サムエル・ベケット原作の演劇であり、フランス語で書かれた。では、はたして両者を比較対照することに意義があるだろうか。この問いに対し、以下の3つの回答を与えることが可能だと思われる。

第一に、簡単に言ってしまうと、『待つ』と『ゴドーを待ちながら』の内容は共に「待つ」という受身の行為に関するものである。

第二に、両作品には文学と演劇の特徴が同時に見られるのではないと思われる。『待つ』の場合は、最後の一文に、「お教えせずとも、あなたは、いつか私を見かける。」とあり、小説の外側にいる読者は、主人公に出会うことが予期されている。これは、作家、または、主人公が小説の舞台に立ちながら、まるで読者を舞台に誘っているかのようなのである。したがって、『待つ』は脚本に近い役割を果たしているのである。

『ゴドーを待ちながら』の場合は、鈴木が脚本の小説性に注目している。「(略) 散文を想起させる『語り』が舞台作品に、『演劇的要素』が散文作品に目立つようになり、両者の機能が曖昧になる²。」

つまり、『待つ』は形式上短編小説でありながら演劇の脚本の特徴を見せ、『ゴドーを待ちながら』は脚本でありながら小説的な特色を持っているのである。

第三に、両作品には戦争に対する描写が見られる。『待つ』は第二次世界大戦中の1942年に書かれたものであり、一般人として描かれている主人公の戦争に対する意見が読みとれる。『ゴドーを待ちながら』は、第二次世界大戦後、1953年に初めてフランスで上演された演劇であるが、その後、米国で大人気を博する。内容は直接的に戦争に関係するものではないように見えるが、戦争の影響下での一般の西洋人の精神的描写が描かれている。戦争で対立した日本と米英仏の国民が受けた精神的な影響を考察する上で、両作品は比較対照する価値を有する。

2. 『待つ』

『待つ』は1942年6月に出版された創作集『女性』（博文館）初出の掌編である。主人公は二十歳の女性で、一人称で語られる。彼女は毎日買い物帰りに駅に寄り、ベンチに座り、そこで待つのである。しかし誰を待つか、何を待つかは不明である。

(1) 戦争との関連

第二次世界大戦に正式に加わってからの日本の風景を佐伯は「半年も経たない内に日本の主要都市は爆撃される。日本列島は文字通り『戦場』と化す³。」と述べており、『待つ』にも戦争の影響が見られる。

井原は主人公が待っていることを〈空白〉と称し、主人公の戦争と精神的な関わりを次のように解釈する。

「大戦争」によって安定した場所を失った「私」とは、その「大戦争」という言葉が示すように、否応なく不安定な時代に放り込まれた人物である。そんな「私」が「大戦争」のもとで空回りする自問自答を繰り返し、「なんだか、わからない」としか言えない〈空白〉をそれまで「選択」して物語るのは、「なんだか、わからない」〈空白〉が「私」にとって戦時下という不安定な時代を想像するものだからなのではなかろうか⁴。

¹ 太宰 (1998) pp. 36-37. 本稿では、『待つ』にある旧字旧仮名を新仮名に改めた。

² 鈴木 (2010) p. 196.

³ 佐伯 (1985) p. 18.

⁴ 井原 (2003) p. 174.

家で母と一緒に生活し、安定した人生を送っていた主人公だが、戦争が始まると同時に不安を感じ、物事が以前と違っていくことに悩んでいる様子が描かれている。そして、井原は主人公の心の底にあるものを次のように指摘する。

このように自信と場所の両方を失った「私」は自分を安定した場所から追い立てたものは「大戦争」であると言い、(中略)「私」は「大戦争がはじまつて」から自分の中に変化が生じたことを自覚しているのである。すなわち「大戦争」が安定した場所を奪ったということとを契機として明確な答えの出ない「なんだか、わからない」〈空白〉を求める「私」の物語は始まるのである⁵。

(2) 不明を待つ

櫻田は主人公が何かまたは誰かを待っているとは明示できないと言う。

「私」の内面では、「期待」と「覚悟」と「空想」などが「異様に絡み合っている。そうしてその状態は「生きているのか」「死んでいるのか」わからない。「自昼の夢を見ているような」現実か空想かの区別さえも、曖昧である。「私」が待っているものは明らかにされない⁶。

同様に、井原も主人公は何を待つか、誰を待つかが不明であることを強調する。

「私」は物語の後半に至って自ら問う時でさえ「何を」なのか「誰を」なのか、決め兼ねているようである。このような揺らいだ状態を一貫して取り続ける「私」から「待つ」ものの具体的な答えを見出すことは不可能ではないだろうか⁷。

(3) 不明な将来

櫻田は作品において主人公が将来を他人の手に任せているような解釈をしている。『待つ』においては、「現れた時には仕方がない、その人にいのちを差し上げよう、私の運がそのときまってしまうのだ。」⁸というような、あきらめに似た覚悟を待っている。

櫻田はさらに主人公の人生の行方を他人に頼る精神的不安定さについて次のように述べる。

その狂気は「待つ」という行為体が持っている不確実な要素、他者依存性と「待っている」人間の置かれている状況の不安定さから来るものである⁹。

しかし、主人公が他人に自分の運命を任せるのであれば、能動的な自分を意識するはずはないではなからうか。つまり、「待つ」という行為の動機には強い自我が含有される。それは櫻田の「作中は『待っている』が十二回も反復され、『私』の『待っている』ことに対するこだわりと決意と混乱が伝わってくる¹⁰。」という主張からも分かる。「私」という意識を持っていなければ、わざわざ「私」を繰り返して言わないと思われる。したがって、自分の運命を他人に任せるところか、自分で何かをし

⁵ 井原 (2003) p. 174.

⁶ 櫻田 (2007) p. 16.

⁷ 井原 (2003) p. 173.

⁸ 櫻田 (2007) p. 17.

⁹ 同上 p. 18.

¹⁰ 同上 p. 16.

ように思うのだが、「私」を自分で助ける方法を見つけられないか、または、戦争という厳しい状況の中で無力を感じているのではないかと考えられる。

(4) 不明な生死

佐伯が「一寸先、自分にとって一番確かなことは『死』でしかなかった¹¹」と指摘している通り、まだ二十歳の彼女が待っているのは死であることがわかる。『待つ』には庶民の戦争に対する考えが表れていると予想できる。この点について井原は次のように語る。

(このように)「私」は国民が一丸となることを強制された「大戦争」のもとでも、一丸となるべく人々の間に入り交じろうとはしない。そしてそうした国民と距離を置いた自分の行動に対して、「なんだか頼りない気持」になると感じながらも、「私」は決して「ここ」にいること、すなわち「待つ」ことをやめようとしないのである¹²。

さらに、櫻田は「待ち続けるという姿勢に価値が見出されている¹³」と述べ、「『待っている』ものが変化をもたらすことを、『尾生の信』の『私』も『待つ』の『私』も、両者も期待しているのである¹⁴」と付け加える。すなわち、待つという行為は受身でありながら、そこには曖昧な期待を有するのである。

しかし、その「私」が何を待つのか、誰を待つのかに関して様々な解釈が可能で、佐伯はこの物語について次のように示している。

何か待っている娘が登場する。でも今言える事は「なごやかな、ぱっと明るい、素晴らしいもの」そんなものが、手を伸ばせば届きそうな、ほんのそこまで来ているような気がする。「わだつみの声」につながっていく若者への、太宰治の励ましのメッセージとも言えるのではないだろうか¹⁵。

この指摘からも思い浮かぶように、主人公が待っているのは生きる意味を与える、生きる価値のあるものでもあろう。

(5) 期待を待つ

要するに、第二次世界大戦がもたらした暗さの中で、絶望を抱く二十歳の主人公は待つのである。男の登場人物が存在しないこの短編では、母と二人で生活している若い女性が描かれ、以前の安定した生活が一転したということが分かる。毎日駅の冷たいベンチに座り、他人を見る主人公は、顔を会わせた人と言葉も交わさないし、交流もしない。そこで、自分の存在価値を問い、役に立つ事をしたと思うが、その方法を知らず不安ばかりで、運命を他人に任せるようなことも考える。しかし、他人に任せることすらできないことから、待っているのは死ではないかとも思われる。主人公はいろいろなことを考えながら待っている。そして、戦時下においては自分でも何かをするべきと感じている。このように、待つことは生き続ける力となり、受身な行動でありながら、よりよい人生を期待することだと思われる。

「待つ」というのは、決して責任から逃げることでも怠けることでもない。様々な可能性の中から一番いいものを選択できないから待っているわけでもない。その時、自分が流されている状況の中で、「待つ」というのは動かない行為である。自分が誰かの、あるいは何かの役に立てることがわかった瞬間、それを実現したいが、その時が来るまでは、ただじっと「待つ」しかないのである。

¹¹ 佐伯(1985) p. 18.

¹² 井原(2003) p. 176.

¹³ 櫻田(2007) p. 17.

¹⁴ 同上

¹⁵ 佐伯(1985) pp. 18-19.

4. 『ゴドーを待ちながら』

『ゴドーを待ちながら』は二幕からなる演劇であり、初演は1953年、パリであった。主要な登場人物はウラディミールとエストラゴンであり、二人は田舎道の木がただ一本あるだけのところで、ゴドーを待つ。二人の会話はあまりロジカルではない。二人は親友のようにも、そうでないようにも見える。ただ一人になれないから共にいるのである。二人に巻き込まれるのはポッツと従者ラッキー、そして使者の少年である。彼らの話にもロジックが欠け、その上、会話の意味もわからない。いくら待ってもゴドーは来ない。しかも、ゴドーは誰か、または、何を象徴するかも分からない。

(1) 作品の評価

『ゴドーを待ちながら』は数ヶ国語に翻訳され、劇場で演じられ、テレビやラジオでも放送された。1953年に出版されてからまだ二十年も経たないうちに、原語のフランス語では5万部、ベケット自らの英訳のほうは35万部に及んだ¹⁶。そこまで人気を博したのは読者がその作品に親しみを発見したからだと思われる。

(2) 虚しさ

『ゴドーを待ちながら』の舞台は存在の無意味さ、また、それに対する恐怖の象徴である。なぜなら、田舎の一本道で、そこにはただ木が一本立っているだけだからである。その木は多々想像するにふさわしいもので、Inoue は、それを「生命の樹、イエスが処刑された木、お釈迦様が下で悟った木」などに例えることが可能だと述べる¹⁷。

主人公のウラディミールとエストラゴンの性格は、まったく相反するものだと指摘される¹⁸。ウラディミールは楽観的で、ゴドーが今日は来なくても明日には来ると思っている。明日来なくても、次の日にはきっと来ると思っている。彼に対し、エストラゴンは自信がなく、暗い人物である。この二人の性格は、人間の善悪を象徴する上で意味深い。

(3) ゴドーとは

二人が待っているゴドーは誰であろうか、または何であろうか。よく言われていることだが、Godot という名前から、それは God、いわゆる神様ではないかという議論がなされている。それに、ゴドーは人物ではなく、ものとして受け取られることもある。それは、幸福、永遠の人生、理想的でいくら探しても手に入らないものとも考えられる¹⁹。

ベケット本人にゴドーは誰かと訪ねたところ、「知っていたら、作品の中で言った」と答えたそうである²⁰。

(4) 微妙な関係

ウラディミールとエストラゴンの友情は疑わしいと言われる²¹。実際に、一人が目の前からいなくなると、もう一人は寂しく感じて、彼を探す。だが、共にいると口喧嘩ばかりし、離れたがっている。しかも、二人の間の会話も無意味な単語ばかりで、作品ではその会話が終わってもまた始まって、その繰り返しばかりが続き、その話には理由がないと強調される²²。

無意味な会話の表現は二人の間だけでなく、ほかの人物との会話でも現れる。単純な単語の意味も曖昧である。Inoue が指摘しているが使者の少年の「あなたは不幸なのか」との問いかけに、ウラディ

¹⁶ Cohn Ed. (1967) p. 7.

¹⁷ Inoue, (2000), p. 3.

¹⁸ Cohn Ed. (1967) pp. 28-29.

¹⁹ 同上 pp. 11-12.

²⁰ 同上 p. 55.

²¹ Inoue (2000) p. 11.

ミールは「知らない」と答えたのがよい例である²²。つまり不幸や幸福の意味さえ分からないからである。

(5) ゴドーは期待である

何も起こらない舞台で、無意味な会話をしているうちに、ゴドーは来るのだろうかという疑問を感じる。Inoue も指摘していることだが、ボヅと従者、それに、使者の少年は来る。しかし、ゴドーは来ない。それにもかかわらず、ウラディミールとエストラゴンは待つ²⁴。待たないこと、それは、死ぬことに等しいものといえよう。だから、二人は時間をつぶすために忙しくする。待つことで、生きてると実感する。ゴドーが来るかどうかは疑問であるが、確かなのは待つという行為をしている自分たちがいる。その点について、「待っている。だから、わたしが存在する。おそらく。」と述べられている²⁵。このように、ベケットが生んだ登場人物が待っているということが読者や観客を魅了する。

次の日、太陽が出ることを知っているから、夜よく寝られる。それは、今日が最後の日ではないと知っているからである。明日があれば、その日何があっても、どんな辛いことが起こっても、次の日は一から始まる新しい人生が可能であろう。人間は、次の日はいいことが起こると期待するから、生きる力を見つける。ゴドーを待つのも同様ではないか。ゴドーが来ると、いいことが起こる。でも、その時まで、待つしかない。他人が来ることには、こちらは無力だからである。したがって、「待つ」という行為は、何かいいことを期待するのである。

5. 『待つ』と『ゴドーを待ちながら』の比較対照

第一次世界大戦の開始直後、1914年8月にハーバード・ジョージ・ウェルズがロンドンの新聞に発表した記事の中に、後に『戦争を終わらせる戦争』という題で本になったものもあった。戦争を終えるために戦争は避けられなかったことを示している。これは人間に戦争の苦しみを耐えさせ、勇気を与えるために重要な役割を果たす言葉であった。戦争が終わり、その巨大な破壊力を経験した世界は、このような狂気に満ちたことが二度とは起こらないと確信していただろう。しかし、わずか30年後、第二次世界大戦が勃発した。

20世紀中に二度も大戦に直面した人間は、今後、第三次世界大戦が起こっても不思議はないと思うようになった。このように、冷戦であれ、ある地方限定の紛争であれ、戦争は起こり続けた。本稿で取り上げた『待つ』は戦時中のもので、『ゴドーを待ちながら』は戦後上演され、これらに描かれている登場人物には戦争の影響が現れている。

両作品において、言葉の意味が曖昧である。二十歳の女性はだれとも言葉を交わしたくない。もし話しかけられたら、困ると思っている。「私は、ぼんやり座っています。誰か、ひとり、笑って私に声をかける。ああ、困る。²⁶」それは、自分の中で何を言えばいいのか分からないからである。ウラディミールとエストラゴンの会話も整合性に欠き、二人と出会う登場人物も話の内容に意味が欠けている。次はその良い例である。

エストラゴン	(囁みながら) おまえにもものを聞いていたろ。
ヴラジーミル	へえ。
エストラゴン	返事をしてくれたかい?
ヴラジーミル	どうだ、うまいか、その人参?

²² Cohn, (1967) p. 27.

²³ Inoue, (2000) pp. 8-9.

²⁴ Ibid.

²⁵ Cohn, (1967) pp. 7-8.

²⁶ 太宰 (1998) p. 35.

エストラゴン ああ、甘いな。
ヴラジーミル 結構。結構。(間) 何が知りたいんだ？
エストラゴン なんだっけな。(囁む) これだからいやんなる。(人参をうまそうに眺める。指の先で宙に回して) 実にうまい、おまえの人参は。(しっぽを瞑想的にしゃぶる) ちょっと待った。思い出しそうだ。(ひと口かじる)

ヴラジーミル で？
エストラゴン (口いっぱいにはおぼったまま、うわのそらで) 縛られているじゃないんだらう？

ヴラジーミル わからんね、さっぱり。
エストラゴン 縛られてるのかって聞いているんだ。
ヴラジーミル 縛られてる？
エストラゴン 縛られてる。
ヴラジーミル 縛られてって、どう？
エストラゴン 手足をさ。
ヴラジーミル 誰が？ 誰に？
エストラゴン おまえのやっこさんにさ。²⁷

そして二十歳の女性は誰を待つのか、将来をその人に任せるかのような、受身の態度を持っている。しかし、待つのは誰か、それが不明であることが次の文章でわかる。

いったい私は、毎日ここに座って、誰を待っているのでしょうか。どんな人を？²⁸

同様にゴドーを待つ二人にも、ゴドーはいわゆる神様か、それとも、よりよい人生へ二人を導く誰かなのか不明である。

二度の世界大戦では、世界中の人々はそれぞれの宗教を信じて、それぞれの言語で祈りつつ救いを待ちながらも、兵隊や民衆を問わず何万人もが命を失った。そして、信仰心は弱くなり、生きる意味を失い、生きる価値はどこにあるかを考えた。エスリンはその状況を「信仰が粉碎された世界」と論じる²⁹。

しかし、人間はけっして弱者ではない。自分の行く道を決定する力を持ち、ただ、それを決めるのに時間がかかるだけなのだ。本稿で取り上げた両作品は、人間が待つのである。無意味で不条理な人生だと思っても、登場人物は今、ここで生きていることを実感しているのは確かだろう。暗い日々を送っていても生きることを放棄するのではなく、人生を諦めず待つ。その待つということが、生き続ける力をもたらすのである。

6. おわりに

文学作品には歴史的、社会的、心理的などの面があり、読者は自分に関するところに集中し、そこから学ぶ。良い人間になる試みをするか、出来事に無関心でいるか、それは自分で選択する。さらに、文学作品は、読者に過去の出来事を伝える重要な役割も果たす。そのとき、当時の人間の感情も述べ、背景も分かりやすく、歴史書より、想像に訴えるものとして印象的である。

戦時中の作品『待つ』は、日本の庶民の戦争に対する不安、恐れ、責任感を問う点で注目に値する。そして、戦後の演劇作品である『ゴドーを待ちながら』は戦勝者側に立っているのにもかかわらず、

²⁷ ベケット (2010) pp. 29-30.

²⁸ 太宰 (1998) p. 35.

²⁹ エスリン (1968) p. 15.

戦時体制で不安のあまり生きる意味を失い、生きることに価値があるかどうかという疑問が描かれている。2006年ノーベル文学賞受賞者オルハン・パムクは受賞講演で文学について「真の文学とは私たちがお互いに共通に抱く無垢で希望に満ちた確実性から生まれる³⁰⁾」と力説した。文学作品は、世界の人々の心が同じであるという確証を与えるものである。

本稿では、サムエル・ベケット作『ゴドーを待ちながら』と太宰治作『待つ』に焦点を当て、文学作品の人間性を分析することを試みたのだが、今後は、特に第二次世界対戦中とその直後、特に1938年から1950年にかけての日本と米国の文学作品を対象に、同テーマで研究を深めて行きたいと思う。

第一次文献

ベケット・サムエル、安堂信也・高橋健也訳(2010)『ゴドーを待ちながら』白水社。
太宰治(1998)『待つ』『太宰治全集6』筑摩書房 pp.36-37.

参考文献

- 井原あや(2003)「太宰治「待つ」論：「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ」『大妻国文』(34)大妻女子大学国文学会 pp.161-178.
- 佐伯昭定(1985)「太平洋戦争下の太宰文学：ゼミナール/『新郎』『十二月八日』『待つ』の印象の就跡『文学と教育』(134) pp.17-30.
- 櫻田俊子(2002)「(閉じられ、開かれた物語-太宰治『待つ』論)『日本文学論叢』(31)法政大学大学院日本文学専攻研究誌 pp.48-60.
- 櫻田俊子(2007)「『待つ』ことの位相—芥川龍之介『尾生の信』と太宰治『待つ』」『日本文学論叢』(36)法政大学大学院日本文学専攻研究誌 pp.12-19.
- 鈴木哲平(2010)「小説的」演劇/「演劇的」小説—劇作『ゴドーを待ちながら』と小説『名づけえぬもの』に見られるジャンルの問題』*Etudes de langue et litterature Francaises, La Societe Japonaise de Langue et Litterature Francaises.*(96) p.196.
- マーティン・エスリン、小田島雄志他訳。(1968)『不条理の演劇』晶文社。
- Cohn, Ruby (Ed) (1967) *Casebook on Waiting for Godot*, (Grove Press: 1967).
- Inoue, Reiko (2000) “The Prisoners in Waiting for Godot: No Time, No Space, and no God,” *Journal of Inquiry and Research*, No. 72, pp. 1-20.
- Pamuk, Orhan (2007) *My Father's Suitcase, The Nobel Lecture*, Translated from Turkish to English by Maureen Freely, Route.

³⁰⁾ “All true literature rises from this childish, hopeful certainty that all people resemble each other.” Pamuk (2007) p. 16.